

統語論・意味論・形態論の研究(2)

高橋 英光

今年度も認知言語学、構文文法、語用論の分野で優れた単著、論文集、テキストが刊行されたが、名著の邦訳も目立った。

まず構文文法から見よう。Masaru Kanetani (金谷優)の単著 *Causation and Reasoning Constructions* (John Benjamins) は、英語の接続詞 *because* に焦点を当て、因果と推論の問題を通言語的に分析した研究である。その主目的は、(i) 因果・推論を表す接続詞を構文文法の枠組みで包括的に説明し、(ii) 因果関係と推論過程の本質を解明し、(iii) 提案した分析の妥当性を示すこと、にある。接続詞 *because* が因果関係 (*The ground is wet because it has rained.*) だけではなく推論過程 (*It has rained, because the ground is wet.*) を表すのは周知の事実である。この現象を「*because*の多義性」ととらえる研究もあるが、著者の論点は、接続詞 *because* は単義であり異なる解釈は使用された2つの異なる構文から生じる、というものである。「接続詞 *because* は多義にあらざ」という主張自体は新しいものではないが、本書は、因果と推論の本質を深く掘り下げ、上記の代表的 *because* 構文に加え「破格」の構文 (*I cannot go out with you today because homework.* など) を含む多様な用法を構文の継承関係として統一的に特徴づけている。さらに、*because* と他の接続詞 *since*, *for*、さらに日本語の接続詞「から」との関係も統一的に分析している。一部の読者には、本書のアプローチが項構造構文の解釈における動詞の意味貢献を削減した Goldberg 1995 の分析の接続詞版、と映るかも知れない。しかし本書は特定のタイプの構文文法に固執せず、広い視点から構文文法のメリットを活かしている。本書は、英語の接続詞研究や因果性と推論過程の類型研究、さらに構文文法に関心を抱く研究者の興味を大いに刺激するだろう。本書は、著者の2008年の博士論文に大幅な改良・修正を施したものだが、これから博士論文や単著の出版を考えている人に良いお手本となる。

本年も、認知言語学の分野でユニークな論文集が出版された。高橋英光・野村益寛・森雄一(編)『認知言語学とは何か あの先生に聞いてみよう』(くろしお出版)は、認知言語学のテキストとしても先端研究の論文集としても読める図書である。過去24年の間に認知言語学の入門概説書、研究書、大学教科書が数多く日本語で出版され、用語辞典も世に出ている。この点で認知言語学の学習環境は以前と比べ大いに充実しているように見える。極端な話をすれば、学習者は原典を読まなくとも認知言語学の道具立て、基本用語、事例研究に精通することも不可能ではない。しかしその反面、「なぜこのような道具立てや用語が必要なのか」「なぜこれらの事例研究が重要なのか」「認

統語論・意味論・形態論の研究(2)

知言語学はそもそも何のためにできたのか」という根本的な問いに明確に答えている図書はさほど多くはない。本書は、このような現状を改善、打開する目的をもって作られている。「認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか?」(第1章)、「認知言語学の文法観はどこが独自なのだろうか?」(第2章)、「認知言語学の意味論はどこが独自なのだろうか?」(第3章)という挑戦的な問いかけに始まり、認知言語学と語用論、レトリック、文法化、コーパス(言語学)、言語普遍性、言語習得・言語進化、ヒトの認知、将来への展望、の問題へと考察が進む。各執筆者は、認知言語学の基本理念に立ち戻り、これらの根源的な問いに独自の視点から明確な答えを提示している。なお本書では認知言語学の創始者達及び認知言語学の先駆けとなった名著10編の解題を読むことができる。各章の執筆者は、編者を除き、西村義樹、長谷川明香、松本 曜、早瀬尚子、大橋浩、長谷部陽一郎、岡田禎之、大堀壽夫、本多啓。名著解題の執筆者は、編者を除き、對馬康博、ペトリシェヴァ・ニーナ、水野優子、菅原崇、眞田敬介。

早瀬尚子(編)『言語の認知とコミュニケーション——意味論・語用論, 認知言語学, 社会言語学』(開拓社)は、言語使用における意味に重点を置きつつ、意味論、語用論、構文文法、認知文法、言語人類学、社会言語学を網羅し、それぞれの研究の流れと最新の動向と進展を扱っている。本書は、5部からなり、各部がそれぞれ、〈はじめに(あるいは概略)〉〈基礎内容部門〉〈応用進展部門〉〈結語(あるいはまとめ)〉、で統一的に構成されている。第1部「最新の意味論研究の進展」は「辞書的・概念的意味と百科事典的意味」から「意味変化と構文化論」までを、第2部「最新の語用論研究の進展」は「語用論という領域」から「手続きの意味と概念的意味の革新」までを、第3部「最新の構文文法研究の進展」では「構文とイディオム性」から「アドホック構文: 談話から立ち現れる構文」までを、第4部「最新の認知文法研究の進展」は「記号的文法観」から「非対称性の言語学」までを、最後のもっとも長い第5部「最新の言語文化研究と社会言語学の進展」では「言語文化研究と社会言語学の概略」から「テクノロジーの進化と社会言語学」までを論じている。このように広範囲にわたる分野が比較的コンパクトな一冊に凝縮され、相互参照的な項目(メタファー、カテゴリー、構文、文法化など)があるのは読者にはこの上なく有り難い。本書は、「言語研究と言語学の進展シリーズ」全3巻の第2巻だが、言語研究の各分野の特殊化・細分化が進む中で英語学や言語学の研究者の研究・教育と学生の学習を助ける、という主旨が見事に実現されている。執筆者は、編者を除くと、吉村あき子、谷口一美、小松原哲太、井上逸兵、多々良直弘。

大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦(編)『認知言語学研究の広がり』(開拓社)は、福岡認知言語学会の設立20周年の記念論文集として出版されたものである。18編の論文を収録しているが、英語、日本語、中国語の構文・表現の共時研究と通時研究に加え、英語教育を含む幅広い分野をカバーしている。二重目的語構文を

回顧と展望

扱った2編(「2つの目的語の関係——障壁モデルにもとづく二重目的語構文の分析」)と「英語の受益二重目的語構文と2つのインタラクション」, big time, big-time, bigtimeが形容詞, 強意副詞へと変化する過程を分析した「Big time 再考」, 「対象指示進化モデル」を提案した「指示詞は何を表すか」, 英語の受身文(および日本語の直接受身)が積極的影響で日本語の間接受身を消極的影響と特徴づけた「日英語の自他動詞志向と受身文——2つの Natural Path の観点から」, 中国語の使役表出文の統語的・意味的特徴を扱った「中国語の〈主観性〉の再考察——使役表出文を例として」を含め力作揃いである。まさに認知言語学研究の広がりを示す一冊となっている。執筆者は, 編者を除くと, 秋山淳, 植田正暢, 王安, 木山直毅, Shotaro Sasaki, 清水啓子, Chiharu Nakashima, 中村英江, 迫由紀子, 樋口万里子, 冬野美晴, 細川博文, 南佑亮。

鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰(編)『メタファー研究1』(ひつじ書房)は, レトリック研究を幅広い立場から行い意見交換の場を提供することを目的とした図書である。本書は, 日本語用論学会メタファー研究会の発表を中心としたシリーズの第1巻となっている。編者によると, 本シリーズは, 多様で多角的なアプローチからメタファーを研究する場を提供し, 修辞学だけではなく言語学, 心理学, 工学, さらに脳生理学, 社会学, 文学, 修辞学, 図像学, 批判的分析など広い分野からの参画を招く研究誌を目指す, とある。本書は, 「第1章 脳科学とメタファー——身体性研究がいかに Lakoff & Johnson (1980) の予見を実質化したか」「第2章 会話分析とメタファー」「第3章 メタファーと身体表象——発語から談話への展開と変容について」「第4章 関連性理論からみたメタファー」「第5章 計算論的アプローチによるメタファー研究の最新動向と展望」「第6章 人の心と空模様——シェイクスピアのメタファーをめぐって」「第7章 〈感情は液体〉メタファーの成立基盤と制約——概念メタファーの「まだら」をめぐって」「第8章 三島由紀夫『金閣寺』における比喩の認知的分析」の計8章からなる。各章を読むと, Lakoff & Johnson (1980) と現代の脳科学や身体性研究との連続性, メタファー研究における(作例から)実例, コーパス, 談話への方法論の転換, アメリカにおける工学系のメタファー研究の隆盛, など最近の重要な展開が明らかになる。メタファー研究の今が展望でき, またこれからの大きな広がりが予感できる論集である。執筆者は, 編者を除くと, 杉本巧, 片岡邦好, 内田聖二, 大森文子, 後藤秀貴。

単著・共著に再び目を転じよう。中右実『英文法の心理』(開拓社)は, 日本語と英語は「道具」と「位置」の見立てが異なる論理で成り立っていることを多様な事例を挙げて論証した図書である。著者は, 「はしがき」で「電気掃除機で部屋を掃除する」「洗濯機で衣類を洗濯する」「体重計で体重を計る」という日本語文が, 英語ではそれぞれ“I go over my room with the vacuum cleaner.” “I wash my clothes in the washing machine.” “I weigh myself on the bathroom scales.” となり, 同じ電気器具が「道具」

と「位置」の解釈に分かれることを観察する。この違いが偶発的な現象ではなく、日英語を隔てる根源的な見立ての違いから生じることを明晰に論じている。本書は、「第 I 部 日英比較 日英語は現実をどのように切り分けるか」「第 II 部 英語特論 英語の特異事例を探究する」「第 III 部 応用問題 英語母語話者の〈構文意識〉を査定する」の計 3 部から構成されている。取り上げられたテーマには「位置は位置でも in か on か」(3.4), 「電話・テレビ・コンピューターを〈位置〉と見立てる論理」(3.6), 「at は on/in と視点の対立がある」(4.2), 「in the street と on the street」(第 6 章), 「なぜ in a car なのに on a bus か」(10.1)の他に, 「catch 構文」(第 14 章), 「hide 構文」(第 15 章), 「wipe 構文」(第 16, 17 章)などが含まれ, 英語学者はもちろんのこと一般の英語学習者にもきわめて関心の高い事例が扱われている。英語学研究における「母語である日本語との往来」を長らく実践してきた著者の学識が凝縮された一冊である。

千葉修司『英語の時制の一致——時制の一致と「仮定法の伝播」』(開拓社叢書)は, 英語の時制の一致に関わる現象に焦点を当て, 日本人英語学習者のための英文法を意識しつつ, 重要な事例, 文法現象を分析している。著者が指摘するように, 現在のことは現在形で, 過去のことは過去形で, というような単純な説明では捉えられない用法が英語には多々ある(本書, iv)。例えば, “(said while planning someone’s murder) The police will believe that he was killed tonight.” では過去形 was killed と時間副詞 tonight が一見矛盾している。しかし, was killed は未来のある時点から見た過去時制を表し, tonight は発話時点(=現在)から見た今夜であり, それぞれ基準点が異なるので矛盾が起こらないと, 著者の分析はすこぶる明解である(第 1 章)。本書は 15 章からなるが, 個人的には, “If you helped me out, I’d give you tickets to any show that you want to see.” と “If you helped me out, I’d give you tickets to any show that you wanted to see.” の 2 文で関係節内の動詞が現在でも過去でも可能な現象を「仮定法の伝播」と捉える分析(第 9 章「仮定法の伝播」)や, “John said that his was / is pregnant.” と “John imagined his wife was / is pregnant.” の文法性の違いを, say などの発話動詞の「意図性の力の弱さ」と imagine などの動詞の「意図性の力の強さ」に委ねる分析(第 13 章「動詞の持つ意味特徴とのかかわり」)を興味深く読んだ。本書は言語事実そのものの魅力・奥深さを読者に伝えることに力点がある。この点で, 英語の時制を教授する人, 英語の時制の研究, とりわけ時制の一致の問題, 日本語の対応表現との共通点と相違点に興味を抱く人に必読の書であろう。

沖田知子・堀田知子・稲木昭子『ことばのインテリジェンス——トリックとレトリック』(開拓社叢書)は, 物語, 対話, 演説, メディア報道, ネットなど幅広いジャンルにおける「ことばとインテリジェンス」の関係性を観察した図書である。本書は, 「第 1 章 ことばをデザインする」「第 2 章 誰が語る——物語の場合」「第 3 章 どう話

す——対話の場合」「第4章 今ここで語りかける——演説の場合」「第5章 情報をデザインする——メディアの場合」の5章からなる。本書には身近にある興味深い事例が掲載されている。例えば「フィクションにおける役割語」(5.2.1.)では、『ハリー・ポッターと賢者の石』の訳文と英語の原文を比べ、森の番人である巨人のハグリッドが話すイングランドの地域方言が、翻訳では東北色の濃い方言に翻訳されやすく、典型的な老人語は、「博士ことば」とも呼ばれる1人称の「わし」や文末詞の「～じゃ」「～のう」、動詞の「おる」など、西日本方言の特徴をもつことを観察している。他にも「メディアの読み込み——ロシアの経済措置」や「他者のことばを借りる」「説得と誘導」「ジョーク」「隠された人称」など読者の注意を引きつける多岐にわたる話題が扱われている。本書は、意味論・語用論・文体論などの総合的観点から情報のデザインとことばのインテリジェンスを論じることを通して、ことばの魅力に迫っている。とくにトリックやレトリックに関心を抱く学生・研究者にお薦めしたい一冊である。

尾野治彦『「視点」の違いから見る 日英語の表現と文化の比較』(開拓社言語・文化選書)は、「視点」の違いから日本語と英語における言語表現と映画ポスターの比較を行い、日英の文化における事態把握の違いを論じた図書である。言うまでもなく「視点」「日英表現比較」「事態把握」を扱った既刊書は多数ある。しかし、本書は、絵本からの例を数多く扱っている点と映画ポスターを事態把握と結びつけて分析する点、が類書と一線を画している。本書の構成は、第I部「体験的把握」と「分析的把握」、第II部 日本語「知覚体験表現」の諸相、第III部「事態把握」の違いからみた日米の「映画ポスター」と「文化」、の3部からなる。例えば「顔」と対応する英語表現のデータ」(第2章, 2.3.3.)では、英語原文に対する日本語訳では、半数以上の「顔」の表現が対応英語表現のない「体験用法」として用いられていることを指摘し、日本語は(英語の分析的把握と異なり)「場面的視点」を取るため「顔」が視覚体験的に用いられやすい、と分析する。また「時・事象の推移の体験」に関わる表現」(第3章, 3.3)では、「やがて」と英語の対応表現を比較し、「やがて」は英語では eventually, finally, at length, at last などに翻訳されやすいが、英訳では「やがて」の持つ「推移の持続」の感覚が捨象され「推移の結果」を表す副詞に転じていると指摘し、日本語の臨場的・体感的な事態把握と関連づけている。また「事態把握の表れとしての映画ポスター」(第6章, 6.5)では、日本版ポスター画像の背景描写が豊かな理由は、「場面内視点」つまり(分析することなく)見たままを知覚体験として捉える事態把握から生じる、と述べる。日英表現比較論、絵本論、翻訳論、映画ポスター論、という多面的な分野に関わる話題を提供する読み応えのある図書である。

篠原俊吾『選択の言語学——ことばのオートフォーカス』(開拓社言語・文化選書)は、「選択」という視点からことばの仕組みを捉えて解説した図書である。本書は計13章からなるが、その目的は「ことばとは選択行為の一種である」という立場から捉

えると、どのような事実が見えてくるのかをできる限り平易に記すことを試みる」(「はじめに」より)ことにある。例えば、第3章「前景、背景の選択」では、芥川龍之介の「桃太郎」を取り上げ、鬼から見た「桃太郎」は読者がよく知る「桃太郎」といかに異なるかを語り、同じ出来事が見る角度によりいかに変容するかを述べる。第4章「システムの選択: 反射の1, 熟慮の2」では、人間の判断のメカニズムにはシステム1(速い思考, 直感的)とシステム2(遅い思考, 複雑な計算など熟慮を伴う)という2つのシステムが作動し、言語表現の選択との関わりを論考する。著者は、直感とは、単なるその場の思いつきではなく日常の経験の集積から生まれるものであり、ことばの背後にある経験の集積の重要性を解く。本書は、認知言語学の啓蒙書・入門書と位置づけられるが、言語学のみならず心理学, 行動経済学, 将棋の棋士の意味決定などからの知見を取り入れている点に独自性がある。特別な道具立てや専門用語を使わずにことばの本質を学生や一般読者に伝えるこのような図書が世に出たのは大変喜ばしい。

最後に、名著の翻訳を紹介したい。まず、「否定」研究の第一人者 Laurence R. Horn の *A Natural History of Negation* (Chicago University Press, 1989) が河上誓作監訳・濱本秀樹・吉村あき子・加藤泰彦訳『否定の博物誌』(ひつじ書房)として刊行された。なお本訳書は、1989年の第1版とその2001年の第2版を翻訳し、さらに原著者による「第3版(日本語版)への終章」を新たに加えて、*A Natural History of Negation* 第3版として出版されたものである。「人間のすべてのコミュニケーションの体系は、否定の表示を含んでいる。それに対し、いかなる動物のコミュニケーション体系も否定を含んでいるものはない」(序章)に始まる大著の822ページに及ぶアップデート版はまさに壮観である。

つぎに、William Croft (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective* (Oxford University Press) が、山梨正明(監訳)・渋谷良方(訳)『ラディカル構文文法——類型論的視点から見た統語理論』(研究社)として翻訳された。クロフトは、認知言語学と言語類型論のもっとも重要な研究者の一人であり、その文法モデルの厳密性、体系性、包括性はラネカーのそれに匹敵するとも言われる。本書はクロフトの図書の初めての日本語訳であり、認知言語学の立場からの言語類型論、つまり認知類型論(Cognitive Typology)という新しい研究領域を開拓した画期的な図書である。本邦訳では、やや難解とされるクロフトの英語が平明かつ正確に日本語に訳され、監訳者と訳者による「まえがき」は原書の全体像を簡潔に要約し、さらに、巻末の「解説: クロフトの言語研究——言語類型論と認知言語学の最前線」は、クロフトの研究歴とその膨大な業績を紹介し、いずれもクロフトの研究の理解の大きな助けとなる。

Robert M. W. Dixon (1994) *Ergativity* (Cambridge University Press) は、能格性

回顧と展望

のもっとも重要な図書と言えるだろう。世界の言語の約4分の1には能格言語的特性があると言われるが、ディクソンの原書は、能格性の諸タイプの包括的な調査に基づき、それらの関連性と意味基盤、談話構成における役割を観察したものである。柳沢民雄・石田修一(訳)『能格性』(研究社)は、原書に含まれる能格性に関わる膨大な数の文法用語をそれぞれ適切な日本語に置き換え、本文を平明かつ正確な日本語に翻訳している。「訳者あとがき」には、ディクソンのジルバル語のフィールドワーク、オーストラリアやフィジー、そして南アメリカのアマゾン地域での言語調査などその研究経歴が簡潔にまとめられている。この名著の翻訳がついに完成したことはすべての言語学者・英語学者にとって誠に幸いである。

澤田治美・澤田治・澤田淳(訳)『談話分析キータム事典』(開拓社)は、Paul Baker and Sibonile Ellece (2011) *Key Terms in Discourse Analysis* (Continuum) の日本語版である。英語学・言語学の分野ではキータム事典の邦訳は比較的珍しいのではないかと思われる。しかし本訳書を読み、その理由を大いに納得した。本書は「事典」ではあるが、通常の事典にはない特徴がある。原書は3部からなるが、第1部では309の「キータム」をリストしているが、第2部では「重要思想家・学者」を42名取り上げ、第3部「重要テキスト」では24冊の名著解題を読むことができる。訳者は原文を忠実に邦訳するだけでなく、必要に応じて用語解説の説明を補うなど読者の便宜を計っている。談話分析の研究者のみならず言語思想・言語哲学に関わる研究者には必携の事典である。

武内道子・黒川尚彦・山田大介(訳)『認知語用論の意味論——真理条件的意味論を越えて』(ひつじ書房)は、Corinne Iten (2005) *Linguistic Meaning, Truth Conditions and Relevance: The Case of Concessives* (Palgrave Macmillan) の全訳である。本書は、真理条件に依拠した意味論は言語的意味をとらえることができないという立場を取り、自然言語の文脈依存と話し手の意図の重要性を重視した認知的アプローチを提唱した図書である。譲歩性、否認と関連性理論の問題に興味を持つ研究者にとってこの翻訳書は非常に有益であろう。

(北海道大学名誉教授)